

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第163号

イザヤ 65:1

平成21年4月24日

ギブオンに住む民たちは、ヨシュアがエリコとアイに対して行ったことを聞いて、彼らもまた計略をめぐらし、変装を企てた。彼らは古びた袋と古びて破れたのに継ぎを当てたぶどう酒の皮袋とを、ろばに負わせ、繕った古いはきものを足にはき、古びた着物を身につけた。彼らの食料のパンは、みなかわいて、ぼろぼろになっていた。こうして、彼らはギルガルの陣営のヨシュアのところに来て、彼とイスラエルの人々に言った。「私たちは遠い国からまいりました。ですから、今、私たちと盟約を結んでください……私たちはあなたのしもべです。」しかしヨシュアは彼らに言った。「あなたがたはだれだ。どこから来たのか。」彼らは言った。「しもべどもは、あなたの神、主の名を聞いて非常に遠い国からまいりました……ぶどう酒を満たしたこれらの皮袋も、新しかったのですが、ご覧のとおり、破れてしまいました。私たちのこの着物も、はきものも、非常に長い旅のために、古びてしまいました。」そこで人々は、彼らの食料のいくらかを取ったが、主の指示をあおがなかった。ヨシュアが彼らと和を講じ、彼らを生かしてやるとの盟約を結んだとき、会衆の上に立つ族長たちは、彼らに誓った。彼らと盟約を結んで後三日たったとき、人々は、彼らが近くの者たちで、自分たちの中に住んでいるということを知った……全会衆は族長たちに向かって不平を鳴らした。そこで族長たちはみな、全会衆に言った。「私たちはイスラエルの神、主にかけて彼らに誓った。だから今、私たちは彼らに触れることはできない。私たちは彼らにこうしよう。彼らを生かしておこう。そうすれば、私たちが彼らに誓った誓いのために、御怒りが私たちの上に下らないだろう。」族長たちが全会衆に、「彼らを生かしておこう」と言ったので、彼らは全会衆のために、たきぎを割る者、水を汲む者となった。族長たちが彼らに言ったとおりである……。 ヨシュア記 9 : 2-27

この世は偽りの情報、欺瞞、詐欺、ねつ造に満ちています。人間史はいつの時代も詐欺にさらされてきましたが、一瞬のうちに膨大な情報を送ることのできるインターネットを通して真偽両情報の氾濫している昨今、善悪、真偽の判断、価値基準が急速に失われ、有害情報による被害者の数は深刻な問題になってきています。時代、人種、民族、国家の枠を超えて絶対の価値基準を教えているのは永遠に不変の神の靈感によって記された「聖書」のみですが、偽り、惑わしの聖書解釈のみならず、聖書を改ざんした疑似聖書もはびこっており、混迷を極めていくのが現状です。「終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、情け知らずの者、和解しない者、そしめる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快楽を愛する者になり、見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです」(テモテ第二 3 : 1-5) と、使徒パウロは警告しましたが、現在はまさに世の終わりの兆候をきたしているのです。天地万物の創造者、デザイナーなる神は、人生のすべての問題を聖書の中に網羅しておられます。今月は旧約の時代に起こった詐欺事件から学ぶことにしましょう。

出エジプト後四十年経ち、約束の地カナン（現在のパレスチナ）に導き入れられたイスラエルの民に神は、カナンの地の七部族を地から追い払い、聖絶するようにと命じられました。聖絶とはイスラエル史の初期に神ご自身のイニシアティブで執行された「特定の民に対する情け容赦のない根絶」のことですが、人間史の他のどの時代にも適用できない異例の厳しい御命令でした。そこで、これらカナンの部族は結束してイスラエルに対戦しようとしたが、カナン入り前にすでにヨルダン川東岸の二つの強力なエモリ人の王国をイスラエルが占領し、イスラエルの神の命令が必ず成就することを聞き知り、恐れていたギブオンの住民たちは、他部族とは単独行動をとり、イスラエルと講和することにより滅ぼされることがないように、策略を企てました。一旦神の御前で結ばれた契約をイスラエルが破ることができないことを知り、イスラエルとの盟約を結びさえすれば、たとえ聖絶の対象とされた民であっても命拾いできると、変装でイスラエルに近づき、だますことにしたのです。イスラエルの掟「町を攻略しようと、あなたがその町に近づいたときには、まず降伏を勧めなさい。降伏に同意して門を開くなら、その中にいる民は、みな、あなたのために、苦役に服して働かなければならない」(申命記 20 : 10-11) も事前知って、「私たちはあなたのしもべです…」と、低姿勢で近づく用意周到な欺きでした。

新しいものを非常に古いかのように偽装したギブオンの住民の巧みな作り話は、神が造られた若い天地を非常に古いものとし、想像できないような長年月をかけて徐々に進化によって造られたとする進化論者の全く根拠のない反説を信じ込ませる手口と共通点があるかもしれません。「この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜け目がない」(ルカ 16 : 8) と、キリストは神を信じないこの世の者たちの处世術のうま

さ、ずる賢さを、神の世を仰ぎ見て生きるがためにこの世では苦しんでいる神の子たちとの比較で語られました。この世の支配者サタンは、確かに、自分の王国に属する者たちには巧みな入れ知恵をして、偽りの情報、欺瞞、詐欺、ねつ造の方法を抜け目なく注入しているようです。新約聖書は、蛇に象徴されるサタンの策略、欺きにだまされることがないようにとの警告に満ちていますが、キリストご自身、サタンを「**偽りの父**」(ヨハネ8:44)と呼ばれました。

イスラエルの民は程なくして、ギブオンに住む者がイスラエルの宿营地ギルガルからたった40km離れたところに住んでいるヒビ人(「蛇」の意!)であることを知ったのですが、すでに神の御前に生かすことを誓ってしまったため、イスラエルの共同体の中での共存を許さざるを得なかったのです。聖絶を命じられた民の一部が命拾いすることができた要因の中でも、背後で、神の掟や預言に人間以上に通じている「**偽りの父**」サタンが巧妙な入れ知恵をして、神の御旨が成就しないように妨害したことは大きな要因といえるでしょう。しかしここで、サタンが勝利したのではなく、神がサタンの策略をもご自分の遠大な人類救済のご計画遂行のために利用されたことは、後にギブオン人がどのように神の民に同化されていったかをたどることによって知ることができます。

「ヒビ人」はノアの三人の息子の三男ハムの子カナンの子孫で、ハムが父ノアに対して行った愛のない辱め(行為)を咎められた神によって「**兄弟たちのしもべらのしもべとなれ**」(創世記9:25)という呪いがかけられた家系でした。また、ヨシュアの時代よりはるか前、イスラエルの民がエジプトでの隷属下に置かれるよりも前、ヤコブ一族がカナンの地のシェケムに住んでいたとき、ヤコブの息子の二男シメオンと三男レビがシェケムの住民を大虐殺するという残忍な出来事が起こりましたが、犠牲になったのはシェケムの「ヒビ人」でした。そのとき、復讐心に血気はやった二人は神の名を利用してヒビ人をだまし、全市民虐殺という大変な悪徳行為を働いたのでしたが、数世紀後に今度はイスラエルの民がギブオンのヒビ人にだまされるという事態が起こったのでした。

約束の地カナンに入って、神が先導して戦われる聖戦のゆえに勝利を重ねていたイスラエルの大きな落とし穴は「**慢心**」でした。和平交渉を求めてきたギブオンの住民の持っていた古びた食料をサンプルとして取り、偽装の疑いを抱きながら、「**主の指示をあおがなかった**」のでした。「**あなたは、注意して、あなたが入って行くその地の住民と契約を結ばないようにせよ。それがあなたの間で、異とならないように**」(出エジプト記34:12)というモーセの警告もすっかり忘れ、まさに自分の悟りに頼り、傲慢に陥った結果、イスラエルは掟で禁じられていた異邦の民と神の名によって誓って契約を交わすという大きな過ちを犯してしまったのでした。

しかし、ギブオン人は欺瞞によって命拾いをしたものの、「**今、あなたがたはのろわれ、あなたがたはいつまでも奴隷となり、わたしの神の家のために、たきぎを割る者、水を汲む者となる**」とヨシュアが命じたように、生命の代価にしもべとして終生仕えることになり、その結果、奇しくもハムの子カナンにかけられた呪いが成就することになったのでした。この後、しもべとしてイスラエルの共同体に加えられることになったギブオン人のゆえに、「あの大きな町ギブオンの勇士たちがイスラエルのしもべになった!」と、近隣の諸民族のうちにイスラエルに対する恐れがつのり、結果的にイスラエルは、残りの部族に対する劇的な勝利へと導かれることになったのです。ギブオン人がその後イスラエルの中で問題を起こしたという記録は全くなく、むしろ、ギブオン人の町は祭司アロンの家系の管轄下に置かれ、四百年後のダビデ王の時代にはギブオンの町に幕屋が設けられ、ギブオン人は勇士としてダビデに仕えたのでした。ソロモンが王位に就いたときには、全焼のいけにえがギブオンの町でささげられ、キリスト御降誕より五百年前のユダの指導者ゼルバベルの時代には、バビロンからの帰還者のリストにも載せられたのでした。さらにエルサレム神殿再建のエズラの時代には、忠誠さのゆえに、ギブオン人の子孫である「**ネフシム族**」(エズラ記2:50)はその名、「**献身した者たち**」の意の通り、神の宮に仕えるしもべたちのリストに加えられました。また、その後のネヘミヤの時代には、ギブオン人はエルサレムの城壁造りに参与し、イスラエルの神の忠実なしもべとして共同体の中に溶け込んだことがうかがえるのです。

ギブオン人は欺きの手段でイスラエルの民と盟約を結んだのでしたが、誓いを守ることを尊ばれた神は、ギブオン人の忠誠に応え、聖絶の対象とされた民であったにもかかわらず、ギブオン人はイスラエルの共同体の中で大きく用いられることになったのでした。このような例を聖書の中にたくさん見ることができます。神の聖絶の御命令には、不義を不義として徹底的に忌み嫌ひ公平に裁かれる聖く、義なる神の厳しい本質が顕れていますが、他方で、神の民イスラエルを出し抜いたにもかかわらず神がギブオン人を救われたことには、神の愛、忍耐、憐れみの本質を見ることができます。イスラエルが神の名で誓った「**言葉**」を守るために、聖絶されるべき民が生かされたということは、「**神の真理の言葉への依存**」が死すべき者を救ったということで、ここには、神の言葉なるイエス・キリストへの信頼、依存が罪人を死から救うという「**神による救いの原則**」が見られるのです。

同様に、イスラエルの民がヨルダン川を渡ってカナンの地に入り、エリコを攻撃する直前に偵察隊を送ったとき、すでにイスラエルのうわさを聞き知って、イスラエルの神を信じ恐れていたカナン人ラハブが二人の斥候をかくまったのでしたが、エリコ陥落時には家族とともに助けられたのでした。ラハブと家族が本来なら聖絶されるべき民であったのに救われたのは、斥候の誓いの言葉を信じて、忠実に従ったからでした。